

# 人権なら

2021年10月1日

第130号

NPO なら人権情報センター

● ひと・まち・生き生き

## いま、部落問題を語る

### 山本英子さんが三宅町人権学習講座で

第3回三宅町地域人権学習講座が9月21日、Mii

Moであった  
= 写真。テーマは「いま、部落問題を語る」



に生まれた『歩』から。山本英子さんに聞く。英子さんの話は山本崇記・静岡大学准教授(写真)が聞き手になって、英子さんから話を聞き出す形式で進化した。

1931年に京都の被差別部落で生まれた英子さん(写真)は、当時の地域の生活や、家庭環境、両親の離婚、祖母の手で育て上げられたことを語った。

英子さんは、保育園でも、小学校でも、平然と差別する保育士や教師の姿に大きな疑問を持ち続けた。小学校を卒業後、働くことになるが、その職場でさらなる差別を体験した。

### 部落解放運動との出会いと識字教室の開設

敗戦を迎え、1950年代後半に部落解放運動と出会う。結婚、出産を経て「平凡」な主婦として地域で暮らしていたが、なぜ、部落が差別されるのかについては誰一人として教えてくれる人はいなかった。



そこに部落解放運動がムラにやって来た。その懇談会に出席。生活、仕事、教育の課題で困っていることや、心配なことはないか、の提起に、初めて部落とは何かについて知った。

朝田善之助さんと出会い、「朝田学校」の生徒とし

て解放運動にも参加。その中で、学ぶためには文字が必要と説かれた。文字に渴望する自分と同じ悩みを持った母親たちと一緒に小学校の教師に何度も協力を求めた。そして、自宅に識字教室を開設した。

### 文字を取り戻す喜びを資格取得にもつなげる

その後、隣保館事業として識字学級が設置された。文字を取り戻す喜びと合わせ、取り戻した文字をいろんな資格取得に繋げようと、各人の希望に合わせて資格を選択する。英子さんは調理師の資格を取得し、給食調理員として小学校で働く。



これによって、世間が広がった。改善事業の関係で部落外で暮らすこともあって、これまでの文化や環境とは大きく違うことを感じた。子育てにも大いに影響していると感じた。

定年後、学び直しとして夜間中学に入る。在日の仲間とも共に学び、ダメもとで定時制高校を受験。10代の若者たちと辛苦を共にした。大学にも入学した。だが、解放運動の窮地を受けて休学した。

### 「解放運動は原点に戻れ」を問い続けてきた

解放運動の再建のため、京都府連事務局長を引き受ける。「解放運動は原点に戻れ」の意味を問い続けた。米田富さんの言葉を思い出し確信する。『歩』『いま、部落問題を語る』を出版。あくなき学びと出会いを希求し、教育は自らつかみ取れ、がこれまで経験してきたことからの確信だという。

全国水平社創立100周年を祝うのではなく、いち早く差別のない社会の実現を目指していく決意を改めて固めてもらいたい、と最後に語った。

## 「人間は尊敬すべきもの」

### 駒井忠之さんが部落解放人権研講座で講演

奈良部落解放人権研究所は9月7日、県人権センターで「人権講座」基礎コース(講座5)を開催。駒井忠之・水平社博物館館長が



「人間は尊敬すべきもの—水平社創立の理念に学ぶ」のテーマで講演した=写真。

駒井さんは、水平社博物館や、水平社を結成した人たちのことを紹介。また、「水平社と衡平社 国境を超えた被差別民衆連帯の記録」が2016年5月にアジア太平洋地域「世界の記憶」に登録されたことを紹介した(衡平社<ヒョンピョンサン>は



日本植民地支配下の朝鮮半島で被差別民「白丁」<ペクチョン>が差別の撤廃を求めて結成した組織)。

続いて、「人権に関する県民意識調査報告書」や、2016年12月施行の「部落差別の解消の推進に関する法律」を説明し、部落差別の現状について語った。

### 水平社宣言は日本で初めての「人権宣言」

このあと、全国水平社発祥の地、柏原で活動した阪本清一郎、西光万吉、駒井喜作らを紹介。1912(大正元)年に結成された「大和同志会」の活動と、同機関誌「明治之光」で展開された部落問題に関するさまざまな議論を説明した。

全国水平社創立の意義としては、大正デモクラシーと佐野学「特殊部落民解放論」の影響があったことや、創立大会の参加者が700人だったことなどを、史料や米田富さんのメモを元にして話をした。

水平社宣言(写真)の〈歴史的意義〉としては、日本初の「人権宣言」であること、在日朝鮮人や在阪沖縄人、アイヌ民族、ハンセン病回復者らの自主的な運動

に刺激を与えたこと、日本の植民地支配下での被差別民「白丁」にも影響を与えたこと、海外の多くの国々にも報道されたこと、英訳された水平社宣言が1923年9月5日の「The Nation」に掲載されたことを紹介した。

水平社宣言の〈現在的価値〉としては、「宣言の思想」を継承する部落解放同盟が中心になって、1988年に国際人権NGO(非政府組織)反差別国際運動(IMADR)が結成され、世界の被差別マイノリティと連帯し、国際的プロジェクトが推進されているとした。

全国水平社創立の理念を集約し、多くの人を魅了する「人の世に熱あれ、人間に光あれ」を、どう読み解くのかをめぐっては、多くの議論がある。大切なことは、個々人がどう向き合い、どう感じるのか。どう解釈するのか、だと述べ、それぞれの解釈が重要だとした。

### 差別の氷を溶かす暖かい人の世を求めて

大日本平等会が1922年2月21日に中之島公会堂で開催した同胞差別撤廃大会で撤かれた「水平社創立大会へ!!」「京都へ! 京都へ」のビラには、「差別の氷を溶かす暖かさ」「暖かい人の世」の記述がある。

この記述は、社会現象として残る差別を抽象的に表現したもので、「水平社宣言」に謳われている「人の世の冷たさ」にあたる。

つまり、「差別の氷」を溶かすのに必要な「熱」は、友好的で人を心地よくする「温(暖)かさ」と考えたのでは、と。また、「人間に光あれ」をめぐ

っては、ルシファー(金星)がもたらす「真理の光」が想定されていて、人間性の原理に覚醒される「光」だと説明した。

さらにまた、人間は尊敬されるべきものであることや、人間の尊厳とは何かを悟らせ、それが絶対であるとする真理に導く「光」では、と説明。卑下意識や差別観念からの解放につながるものだと語った。



## コロナ感染症と差別・人権

吉田栄治郎さんが7月、法隆寺発行の「差別をなくそう」No. 37に論考「感染症と差別・人権」を寄稿した。本人の了解を得て要約を掲載する。文責は編集部。



2019年末に中国武漢で発生したと思われる新型コロナウイルスは瞬く間に全世界に広がった。感染者は2億3千万人超、死者は470万人超に達する(9月28日現在)。感染者5億人と死者5千万人を出した第一次世界大戦最末期に発生した「スペイン風邪」以来のパンデミック(世界的大流行)だ。



日本の感染者は170万人弱。死者は1万7千人超。西欧や米国、中南米、インドに比べると、かなり少ない。だが、東アジアの中では最多で、繰り返される緊急事態宣言による日常生活の制限、圧迫によって社会の動揺、混乱は極限に達する。

### 日本社会の宿痾をさらけ出したコロナ感染

この動揺、混乱は日本社会の宿痾をさらけ出した。同和教育・人権教育は共生や多様性、人権尊重の大切さを児童生徒に教えてきた。政府・自治体も社会教育や啓発を通じて国民に教化を重ねてきた。だが、多様性尊重に反した「異なる者」への理不尽な差別、忌避、排斥は根強く残っていることが明らかになった。

コロナ感染は悲しい事態を数多く引き起こしている。部活動で多数の感染者が出た島根県の某高校に対して「日本から出ていけ」「学校を潰せ」の書き込みがネット上であった。母親とともに感染した広島県の小学6年の児童には、「卒業式に出るな。常識なし家族が」と記したハガキが自宅に投函された。

奈良県では、某大学の運動部で発生したクラスターにより、無関係な一般学生が教育実習やアルバイトを拒否された。感染者が出ていなかった県では、県民が最初の感染者になることを極度に恐れているとの報

道も。感染第1号は必ず差別を受け、迫害され、住みにくくなるとの思いが県民に共有されていたのだ。

### 差別、忌避、排斥を止める力を与えなかった

これまでの同和教育・人権教育はなぜコロナ感染した人々への差別、忌避、排斥を止める力を国民に与えなかったのか。おそらく科学的認識に沿って進められたのではなく、情緒的、感性的、あるいは建前としての対応を教化するだけに止まったためではないか。

学習で獲得した知識を社会的に活用する能力(リテラシー)にまで高めなかった。日本人の多くは多様性の尊重を知識、建前として受け止め、それに情緒的、感性的に対応する習性が身につけてしまった。「してはならない」「してはかわいそう」「することは許されない」の言葉に象徴される水準に止まった。

それを確認させる事態が起こった。日本での感染者が少なかった昨年6月、某大臣がそれは「日本人の民度が高いからだ」と発言した。要するに、教育・文化・知的水準が高いからだということだ。発言は多くの日本人の心に心地よく届いたことは想像に難くない。だが、コロナは「民度」に付度などしてくれない。発言は感染者への差別・排斥を生み出すことになった。

### 差別・排斥を生んだ「民度」「ファクターX」発言

ノーベル賞受賞者の山中伸弥先生は日本の感染者・死者の少なさの要因に「ファクターX」があるのでは、と指摘した。少ないことの原因がわからず、やむなく謎の要因に「ファクターX」と名付けたのだろう。

山中先生の意図とは別に、「ファクターX」はコロナ感染を情緒、感性の世界に閉じ込める役割を果たした。感染者を日本人なら守られるはずの「ファクターX」にも見捨てられた人というカテゴリーに閉じ込めた。

言うまでもなく、リテラシーは科学的認識によって獲得する外ない。「民度」も「ファクターX」も非科学的な説明だ。コロナは、感染力は強いが致死率の低いウイルス。誰もが感染する可能性を持つものと認識すべきだ。歴史は無知が悲劇を生むことを教えている。



## 「百按司墓」撮影ビデオを上映

### 琉球遺骨返還請求訴訟第10回口頭弁論で

琉球遺骨返還請求訴訟第10回口頭弁論が8月27日、京都地裁であった＝写真。百按司墓を撮したビデオを法廷で上映。

波平恒夫・琉球大学名誉教授、翁姓門中の永山さん、芥川賞作家の目取真俊さん



らが墓と共同体をめぐる関係性をビデオ証言した。

被告の京都大学は「祭祀継承者は一人であり、祭祀主宰者は具体的に定まるものでなければならない」と主張する。だが、百按司墓の葬祭方法は「祖先の遺骨を一つの墓に納めて共同で祭祀。琉球では「祖霊神」信仰が存在。遺骨は「骨神(ふにしん)」という拝みの対象。「共同体の守護神」(波平教授)なのだ。

また、琉球民族は先住民族。風葬・骨神信仰という独自の文化を享有する権利、遺骨の返還権を有する。民族的マイノリティの権利を定めた自由権規約など、国際的基準が日本の憲法や民法にも取り入れられなくてはならない、として遺骨を返還すべき、とした。

### 編集後記 ★★★★★★★★★★★★★★

「ホームレスの命はどうでもいい」「生活保護の人たちに食わせる金があるんだったら猫を救って」。名の知れた人物が動画サイトに投稿した。45人を殺傷したやまゆり園事件の被告は「重度の障害者は安楽死」。維新候補者も「人工透析患者なんて実費負担させよ。無理だと泣くなら殺せ」。どれも思考が同じだ。ナチスの障害者虐殺の根底にあった優生思想が蔓延る。少数意見と無視してはいけない。国の入管行政や朝鮮学校への補助金不支給など、異民族排斥政策の影響も大だ。苛立ちや不満を弱者排他に求める社会にはいけない。冷静かつ深い思考が必要だ。

## 遺骨は一つの墓に納めて共同で祭祀

終了後、京都御所内で報告集会。定岡由紀子・弁護士は「沖縄の墓は『みんなの先祖』というのが慣習。先住民の権利は国際条約で保障。日本の民法をそのまま適用することは国際条約上違反だ」と。

普門大輔・弁護士は、京大は段ボール箱を写しただけの写真を提出。原告弁護士が立ち会う資料撮影にも不同意。写真は出さないだろう、と。

李承現・弁護士は、私は在日。韓国での墓の承継者は1人。琉球は1人ではない。遺骨が眠る沖縄の土砂を基地の埋め立てに使うことに批判も出ている、と。

丹羽雅雄・弁護団長(写真)は、今回は亀谷・松島両人の証人。来年1月結審、2か月後に判決予定。来年は1947年の天皇メッセージ75年。1972年の沖縄返還50年。京都・沖縄で連動した闘いが必要、と。



松島泰勝・龍大教授は、先日、京大博物館に行った。奄美・琉球研究者に会いたいと伝えると「メールで申請を」と。メールすると「係争中で(会えない)」の返事。京大には未だに日本帝国主義が続いている、と。

奈良沖縄連帯委員会の崎浜盛喜さんは、保守系議員の多い奈良県議会が遺骨の眠る土砂の基地埋め立て使用に反対する意見書を全会一致で採択した。遺骨訴訟は人間の尊厳を勝ち取る闘いだ、と。

ビデオ制作者のジャーナリスト、西村秀樹さんは、北海道大学はアイヌへ遺骨を返した。京大はなぜ返さないのか。現在、DVDを作成中。次回裁判の前日集会には上映したい、と。

次回公判は10月29日午前11時半から。

### ニュースレター「人権なら」

発行:NPO法人なら人権情報センター

〒636-0223

奈良県磯城郡田原本町鍵301-1

TEL:0744-33-8585/FAX:0744-32-8833

E-mail:info@nponara.or.jp

http://www.nponara.or.jp/